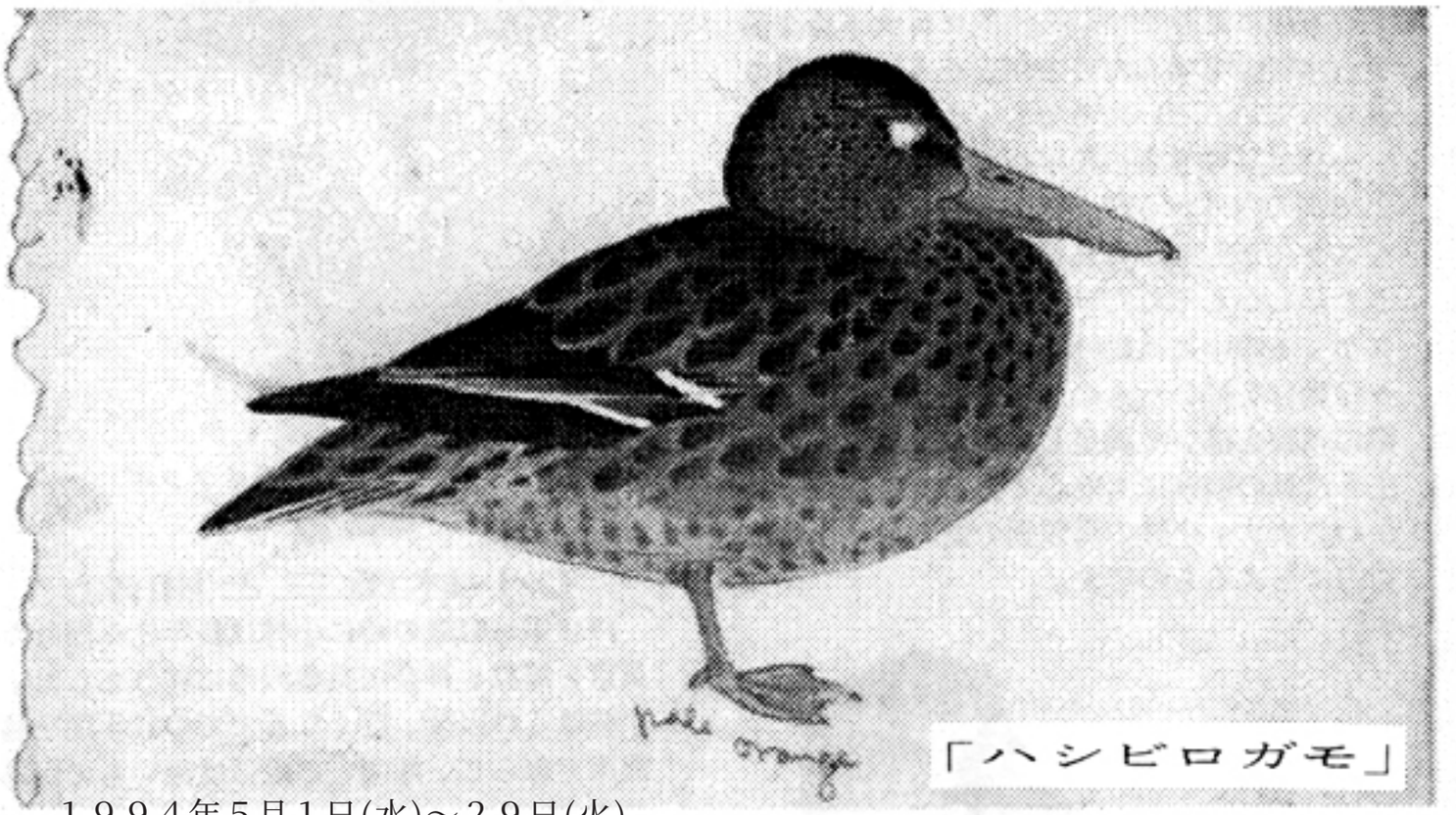


「ハシビロガモ」

１９９４年5月1日(水)～２９日(火)

春期特別展

鳥類画家：小林重三

5月1日(日)～29日(日)

■動植物の図鑑を使っている方は多いと思いますが、自分の愛用している図鑑の絵を誰が描いたかまで気にしている方は少ないと思います。

■戦前から昭和３０年代まで、日本で刊行された多くの鳥類図鑑に絵を描いた 小林重三（こばやししげかず）のことも、今までほとんど注目されることがありませんでした。

■近年、児童文学者の国松俊英氏や日本野鳥の会の園部浩一郎氏の努力で、小林重三の仕事の全貌が明らかになるにつれ、彼が日本の動物学の普及と発展に大きく寄与してきたことが裏付けられてきました。

■この展覧会では、次のような資料を展示し「鳥類画家小林重三」の仕事を紹介します。

●油彩による鳥類画（４点）

●水彩による鳥類画（「野鳥歳時記」の原画１０点）

●デッサン・スケッチ（約１２０点）

●著作した図鑑類（約５０点）

●「野鳥カレンダー」およびその原図（林野庁発行　１２点）

●「狩猟鳥類掛図」（大正13年発行　５点）

●愛用の画具（筆など　１０点）

記念行事

◆記念講演会　「鳥類画家：小林重三」

日時：５月２９日（日）午後１時半～４時

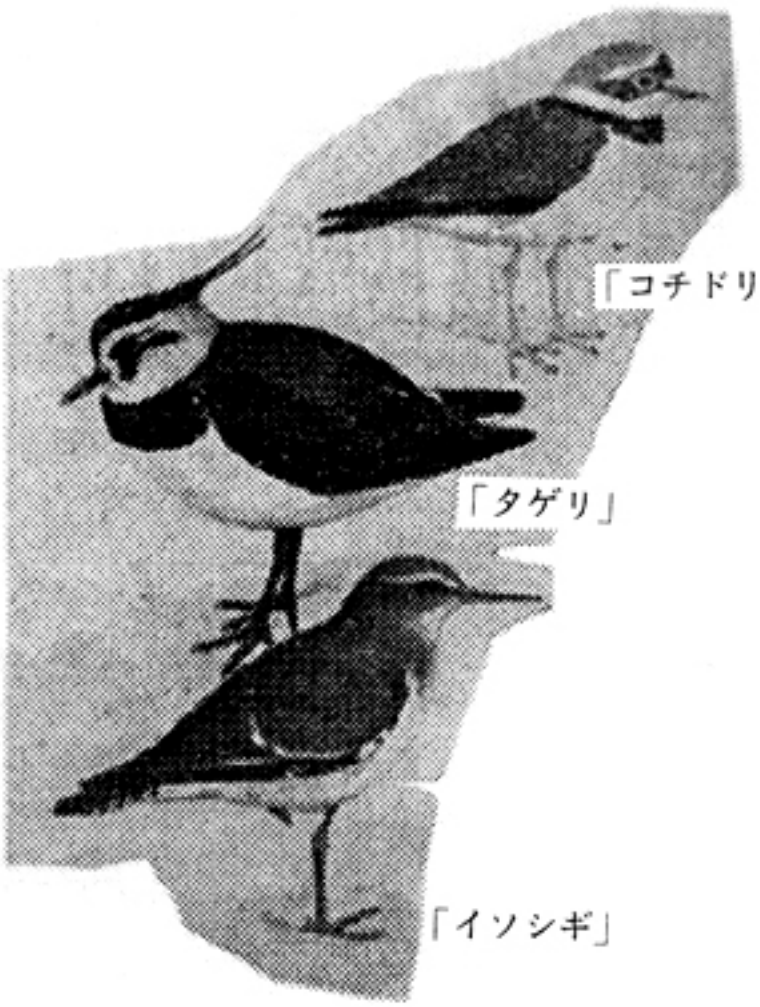
講師：国松俊英氏（児童文学者）

会場：博物館講堂（入場自由）

◎小林重三の描く鳥

小林重三は多くの鳥類図鑑に数えきれないほどの鳥の絵を描いていますが、見なれると一目で小林の描いた絵であることが分かるようになります。小林の描く鳥の特徴は、「羽のふわっとした感じを表現している」とか「鳥が生きている」とか評され、軽やかに空を飛ぶ鳥という動物の雰囲気を上手に表現している点にあります。技法的には大下藤次郎から水彩画を学んだことが、そうした表現に役立っているといえるでしょう。

小林は鳥類学者の松平頼孝や黒田長礼のもとで国の内外から次々に収集される剥製標本をスケッチしながら鳥類画をかきためていました。しかしそれだけでなく、今回展示したスケッチの中には動物園や飼育された鳥の様々な動作を描いたものが多く含まれ、小林が単に剥製を描いて満足していたのではなく、生きた鳥の観察にも熱心であったことがうかがわれます。小林の鳥類画の魅力はそうした努力にもよるものです。



「コチドリ」

「タゲリ」

「イソシギ」

「オオタカ」

◎小林重三と湘南

1948年、61歳の時に小林は長年住み慣れた東京を離れ、神奈川県藤沢市に移りました。小林はこれ以後、亡くなるまでの27年間を藤沢市で暮らし、湘南との縁には深いものがあります。

1950年には藤沢市美術家協会が結成されましたが、その第1回展覧会に、小林は油彩画3点を出品しています。また、1952年には日展に油彩画「片瀬川」を出品して入選しています。

この頃、小林は鳥類画の仕事を続ける一方で、好んで湘南の風物を油彩に描いています。特に海とそこに働く漁師達の姿が、しばしばカンバスに描き出されました。繊細な鳥類画とは異なる荒々しいタッチの絵は、小林の別の才能を示しているようです。それは若い頃に画家を志し、水彩で多くの風景画を描いた初心にかえって、絵画の創作を楽しんでいたようにも思えます。

◎図録販売中

展示した資料の内、デッサン類を中心に図録を編集しました。

B５版５６ページ（カラー４ページ）

頒価：1000円

よろしくご活用下さい。

春期特別展 記念行事 講演会開催 『鳥類画家：小林重三』

■特別展「鳥類画家：小林重三」の最終日＜５月２９日（日）＞に、国松俊英先生をお招きして講演会が開かれました。国松先生は『ペルシャ湾の水鳥をすくえ』などの作品で知られる児童文学者で、自然と人間の関わりを描いたノンフィクションに力を注いでおられます。国松氏は、忘れ去られようとしていた鳥類画家小林重三の仕事を再評価することに努力を傾けて来られ、今回の講演会でも興味深いエピソードを織りまぜながら小林重三の生涯についてお話下さいました。

■お話によると、日本最大の鳥類画家である小林を育てたのは３人の人物でした。その一人は日本の水彩画の父ともいわれる大下藤次郎で、小林の絵の技術は、水彩画の普及に力を注いでいた大下の薫陶によるものだそうです。２番目の出会いは鳥類学者の松平頼孝で、小林を雇い入れ、１２年間にわたって、鳥類画に専念させました。残念ながら、松平家の財政状況が悪くなったために、この時期の仕事は実を結びませんでしたが、その後の活躍の基礎はこの時に作られたようです。３番目の出会いは同じ鳥類学者の黒田長礼で、そのもとで小林の絵は多くの本にいかされたのです。

■国松先生の講演を聞きながら、大きな仕事を成し遂げた人の人生にも様々な浮沈があったこと、また多くの人との出会いがそれを支えてきたことを改めて感じました。